

本書の共著者の一人である Lukman Nurhakim 氏(インドネシア国立考古学研究センターのイスラム時代研究部長)が1995年9月に急逝されたことに、同氏と共に本遺跡の調査に参加した一人として、謹んで哀悼の意を表したい。

注

- (1) 「スンダ Sunda 王」初出のシャカ暦854年紀年の碑文。ボゴール地方で発見。  
Notulen Bataviaasch Genootschap 1918。
- (2) 坂井 隆。1992。「スンダ海峡地域の城郭都市遺跡 バンテン・ギラン遺跡調査参加記」『東南アジア考古学会会報』12 136-149頁 東南アジア考古学会, 1995。「東南アジアと日本の中近世港市 図化資料から見た港市の防衛と機能」『日本考古学』2 161-180頁, 日本考古学協会
- (3) 大橋康二・坂井 隆・扇浦正義。1994。「インドネシア・バンテン遺跡出土の中国・日本陶磁器」, 『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』, 東京
- (4) バンテン・ラーマの文献史的な概説書として The Sultanate of Banten, Gramedia, 1990, Jakarta を著している。

Van Tao, Furuta Motoo

*Nan doi nam 1945 o Viet Nam : nhung chung tich lich su*

Vien Su hoc Viet Nam, 1995, 727pp.

ヴァン・タオ, 古田元夫著

『ベトナムにおける1945年飢饉——歴史の証拠』

ベトナム歴史学研究所, 1995年, 727頁

岡田 建志

昨1995年は、日本では戦後50年の節目として様々な行事が催され、関連の書籍の出版も相次いだ。一方、ベトナムでは八月革命と独立50周年を記念して同様に関連の行事や出版の集中する年となった。本書の出版もその一つに数えられよう。ベトナムは1940年9月の日本軍北部仏印進駐に始まる日仏共同支配期を経て、1945年3月9日の日本軍によるいわゆる仏印処理以降は日本の単独支配下に置かれていた。そのような

状況の中、1945年の前半にベトナム北部では飢饉が発生したが、日本ではこの事実は研究者や当時の関係者以外にはこれまでほとんど知られていなかった。本書は、その飢饉の実態について日本ベトナム友好協会とベトナム日本友好協会の共同研究プロジェクト「第二次世界大戦期の日本とベトナムの関係の研究」の一環として1992年から1995年にかけて行われた歴史社会学的調査の結果をまとめたものである。

まず、本書の構成を紹介しておきたい。第1部は導入部としてヴァン・タオ氏が研究の意義を、古田元夫氏が日本における研究状況を記している。第2部は本書の中心となる部分で、飢饉についての現地調査の報告がなされている。その冒頭でヴァン・タオ氏が調査方法について述べ、続いて3次にわたる村落調査の結果が示される。第3部には文献史料と写真が収められている。第4部はヴァン・タオ氏の執筆による結論部である。巻末には文献目録と索引が付されている。

次に内容を見ていきたい。第1部でヴァン・タオ氏は、まず、1945年の飢饉がベトナムの人々にとっては忘れ難い悪夢であり、人類にとっては明らかにしなければならない歴史的事実であると述べている。そして、この問題について越日両国の歴史学界が最も関心を持っているのは、歴史の真理、即ち日本や世界の人々に知られていない1945年飢饉についての事実がどのようなものであったかということであるとしている。続けて、この事実が知られていないのは、事実の隠蔽や史実の歪曲が行われていたことによるものであり、かかる事情ゆえに、飢饉についての事実を明らかにすることが今もベトナムの歴史学界にとって課題となっていると述べられている。餓死者の数については1945年9月2日の独立宣言に200万人以上という数字が記されているが、日本では餓死者の数だけでなく飢饉の原因や被害の状況についても知りたいという要望があることが言及されている。次に、史料については、形として残っているものは多くの餓死者を1カ所に葬った「集団墓」のみであり、文献史料は豊富だが科学的かつ慎重な扱いが必要であって、餓死者の数を明らかにするためには歴史社会学の方法による現地調査が重要な史料となることが指摘され、本書の重点が21省・市の計23の地点における現地調査の結果の提示にあることが示されている。続いて、古田氏が当時のベトナムにおける日本の行動についての日本における研究状況を、軍事・政治面、経済面及び飢饉についてという3点に分けて概括している。そのうち、本書の主題である飢饉については、日本が当時ベトナムで行った米の徴発について体系的に述べた資料が日本では未発掘のためベトナム側の資料によって研究が行われており、今に至るもこの問題を単独で取り上げた研究書がない状況が記されている。そして、今後の研究課題として、インドシナにおける日本軍の米の徴発・備蓄のメカニズム、地方毎の

飢饉の具体的な推移と死者の数、この飢饉の持つ意義の検討が挙げられている。

第2部ではまず調査方法が説明されている。飢饉が北部の32省2都市という広範囲で発生したのに対し、調査の経費と労力には限りがあり、また一定の期間内に行わねばならないため、調査地点としていくつかの場所を定め、そこからその地方全体の飢饉の実態を総括するという方法がとられた。タイビン省ティエンハイ県タイルオン社で試験的に行った調査の結果、社を単位とすると地元の行政サイドや諸団体の協力を得られるという利点がある反面、現在の社が旧村落と一致せず調査範囲としても広すぎるため、第2次・第3次の調査では旧村落に相当する現在の村(部落)を調査地点とする方が適切だと判断された。調査地点は面積、人口、飢饉の被害の程度等の面でその地方の典型であり、かつ証言者の人数が確保され、その地方の行政サイドや住民の協力も得られる場所ということを考慮して選ばれた。第1次調査(1992年)はタイルオン社1カ所、第2次調査(1993—1994年)はハノイとハイフオンの郊外各2カ所及びナムディン、ニンビン、ゲアンの計7カ所、第3次調査(1994—1995年)はクアンチ省以北の15地点で行われた。その中には飢饉の被害が少ないとされていた中流・山岳地域を含んでいる。第3次ではその地方の概況や、飢饉発生前の土地所有、経済・社会の状況、住民の生活を把握することに重点を置き、統計では餓死者の数だけでなく各世帯毎の生活状況に注意が払われている。また証言者の話は録音した。地点によっては地方の資料を用いて県または省単位の飢饉の状況を概括したところもある。調査結果は529ページにわたって掲載されており、調査地点それぞれについて、地理的・経済的概況及び飢饉の状況が記され、調査で判明した世帯毎の人数・餓死者数・経済状況が表として示されている。その後には飢饉に関するインタビューを受けた人々の証言が掲載されている。第3部には米の徴発に関する日仏間の協定、徴発の実態、ジュート栽培の強制、飢饉の実態等に関する文献史料や写真家ヴォー・アン・ニン氏の撮影した飢饉の写真が収められている。

結論では、まず、飢饉がクアンチ省以北の北部全域で発生し、中心は北部の沿岸諸省で、他の諸省でも被害は深刻だったと述べられている。また、調査地点中総人口に対する餓死者の比率の最も高い各地点と最も低い各地点とに基づいて平均値を出すと少なくとも15%になり、これが現実に近い数値だろうとしている。また、飢饉による被害がすべての階層に及び、特に雇農、貧農、手工業従事者、漁民といった貧しい階層が深刻な被害を受けていると指摘されている。次に、飢饉を引き起こした最も根本的な原因は日本とフランスによる米の徴発であり、そのうち主として責任を負うべきなのは日本であると述べられる。飢饉の被害・後遺症の内容としては、多数の死者、

生態系の破壊、労働力の減退、農業の停滞、文化の破壊、今なお残る敵愾心、ベトナム経済への深刻な打撃等が挙げられている。また、ベトナム史と世界史上の比較から、ベトナムの1945年飢饉が世界史上比類ないものであるとしている。

本書の持つ意義としては、まず1945年の飢饉に関して村落の実地調査が行われ、具体性の高い数値が結果として示されたことが挙げられる。ドイモイ政策がとられる以前はベトナムで外国人も参加して村落調査を行うことは困難であったし、1945年飢饉に関してはヴァン・タオ氏が第2部の冒頭で述べているようにベトナム人の手による実地調査も無きに等しかった。更に、結論でも述べられているように、従来被害が少ないと考えられてきた山岳地域や中部北半の諸省でも大きな被害が出ていたことが明らかにされたのも大きな成果と言えよう。個々の証言の内容も、飢饉体験者の高齢化が進む今、飢饉の深刻な実態を具体的に伝えるものとして極めて貴重である。また、地方出版物を含む文献史料の項も殊に外国人研究者にとっては有益なものである。その一方で、結論の末尾にも述べられているように様々な制約から調査地点が限られたことは指摘しておかなければならない。また、調査地点として設定された村落は、調査全体としてみれば地理的・経済的に様々なタイプを含んでいるとは言え、地方ごとの飢饉の実態を明らかにするためには、選定された村落がその地方の典型と言えるかどうかをなお慎重に検討しなければならないだろう。また第1部でも述べられているように、本書の主な目的は調査結果を公にすることにあり、調査で得られた数値の詳しい分析や文献史料との照合等は更なる研究が待たれる。いずれにせよ、本書は今後の1945年飢饉に関する研究の礎となって新たな展望を開くものであり、日本語版の刊行が期待される。

Amando Doronila

*The State, Economic Transformation and Political  
Change in the Philippines, 1946 ~ 1972*

Oxford University Press, Singapore, 1992.

堀 芳枝

フィリピン国家は政治経済や社会変動に対して、どのような役割を果たしてきたの